

フィールドワーク 心得帖

ゼロ環境フィールド ワークからの歩み

入所以来、これまで二つの領域でフィールドワークをしてきた。最初の一〇年間は、工業化と産業組織の領域で主として産業政策管轄官庁と製造業の現場である。つぎの一〇年間は、対象ががらりと変わり、障害の領域で、当該国の障害者政策担当官庁や当事者団体・各障害者の家庭である。しかし、いずれにおいても私が置かれている条件は変わらなかった。何より外国人である。そして私は耳が聞こえない障害当事者であった。

●インタビュウのできないゼロ環境

アジア経済研究所に入所して、途上国の産業政策の現場に投入された私を待っていたのは、シニアの先輩方の言っていることも、現地でのインタビュウ相手の言っていることもさっぱり分からないというシビアな現実である。生まれつき耳が聞こえない私はそれまで、大

学時代には手話サークルを自ら創設し、その人達に手話や聞こえない人達のことについて教え、代わりに彼らにノートテイクや手話通訳してもらって大学のバリアフルな環境と戦ってきた。しかし新たに仕事の現場に足を踏み入れると、こうしたそれまで築いてきた環境はすべて遙か彼方である。そうしたゼロ環境から仕事をしていける環境をその場、その場で作っていくことから私のフィールドワークは始まった。

まず自分と同じような条件の研究員はいないので、他の研究員の条件に合わせると私は圧倒的に不利な状況に置かれることがだんだんと分かってきた。現地に複数人やグループで出かけて行ってインタビュウをするという当時のシニアの人達とは一線を画する必要がまず自分には出て来た。この方々の後塵を拝しているだけでは、自分の条件に合ったフィールドワークはで

きない。聞こえる人達がすでにインタビュウを終えていた内容であっても、こちらにはそれは聞こえていないのだから、彼らと一緒にそれを二重に聞く羽目にもなってしまう。そのためには、単独で調査に行かせてもらわなくてはならない。そのための実績をあげる機会を待ち、サービス貿易に関する調査の際にそうした機会が十分に訪れた。他に誰も行ける人員がいなかったのである。フィールドであるフィリピンで中銀や統計局などを精力的に回り、自分が聞こえないことを説明して、紙とペンをフルに駆使しながら得るべきデータを持ち帰って、報告書を執筆。ようやく単独での海外出張が、それで降許されるようになった。フィールドワークのために必要な環境も、順番も聞こえないものに合わせた先駆者のいないフィールドワークの調査論を組み上げていかなければならなかった。

●ICTと手話

つぎに私が取り組んだのは、ICTの積極的利用と現地における手話通訳の採用である。当時、まだインターネットは普及していなかったがFAXが多く、現地企業のオフィスに入り始めていた。日本からノートパソ

コンを持ち込み、ホテルの部屋の電話回線を(無断)改造してモジュラー・ジャックに変換。部屋からFAXを各企業のオフィスに送りまくり、電話ができない状況をカバー。日本からやってきた耳が聞こえない調査員にさぞ、現地での対応の担当者たちはびくくりしたのではないだろうか。しかし逆にそのことで、こちらの熱意を訴えることには成功し、思いもかけぬ裏話や相談を持ちかけられることもしばしばであった。なかには退職後の身の振り方を相談してきた部品メーカーの現地人役員もいた。

また研究所にある現地語研修の制度を利用して二年間、タガログ語を学んだものの、相手が



フィリピンの家族全員がろう者のデフファミリーのメンバーと。

専門分野は、開発経済学（特に産業組織論、産業政策）、フィリピン経済、障害と開発。近著に『途上国障害者の貧困削減—かれらはどう生計を営んでいるか』（2010年、岩波書店）、『障害と開発—途上国の障害当事者と社会』（アジア経済研究所、2008年）などがある。

話す言葉は聞こえないだけに、スムーズなコミュニケーションにはまだバリアがあった。しかし、ここで意外な展開が出てくる。観光スポットもほとんどない国が担当であったため、現地に何年も毎年のように通ううち、週末は、現地のろう者達のコミュニティとの関わりがなかつた。コミュニケーションのなかに入り込んでのフィールドワークをしていくことになる。そうしたなか、手話通訳の制度が現地ではまだ不十分なことなど日本との違いを教わる機会を得ただけでなく、良い優れた手話通訳者にも出会うことができた。こうした人達を伴って地域の企業へのインタビュースタッフもするようになった。現地の手話をマスターできたからのことであるが、この手話通訳者は同時に現地音声言語、タガログ語のネイティブ・スピーカーでもある。インタビュの際に現地語でもって、貴重な製造業の現場やネットワークについての情報を得られるようになっていった。特に人の紹介では現地製造業者が自分や紹介先の相手が英語が不得手であっても安心して知り合いを紹介してくれるという効果もあった。ジブニーのドライバーの親方の団体へのアクセス

や対立する部品業界団体の裏事情などすぐには論文にはしにくい情報等、フィールドワークの楽しさも深まりを見せていたのもそんな頃である。

●障害というフィールドワークへ

一方で、手話通訳を自分自身は利用できても多くの地元の人々からは政府との交渉の時ですら、手話通訳を十分に利用できないという現実にも気が付きつつあった。また偶然にも、ろう者以外の障害リーダーたちが様々な取り組みをしていることを関係者から聞く機会もあった。そうしたなか、国際協力機関での「障害と開発」に関わる会議に出る機会があったこともあり、この分野でのフィールドワークにも乗り出したのである。それまでの言わば、きれいな舞台とは異なり、貧困世帯の調査も含むまさに途上国らしい現場である。また政府機関では、様々な政策が予算の不足や人材配置の問題などにより、うまく動かないでいることを目のあたりにできた現場でもあった。

大きく関わる現場だけに日本にはない制約が多数、そこにはあった。障害分野では、アクセシビリティへの配慮が大前提となる。これはつまり、聞こえない人には手話通訳なり、目で見分ける資料、目が見えない人には点字なり音声による資料や拡大資料を用意、肢体不自由の人達には面会場所への車椅子の移動のしやすさや温度調整のしやすい環境等への配慮など多くの条件を整備するということがある。でなければ、フィールドワークのためのインタビュースタッフのためのインタビュースタッフでないことになる。互いに問題を共有できる人間関係、ラポールが築かれていないとならない。

●フィールド・ワークの環境は今

障害の調査をするようになってからの時代は、ICT全盛、インターネットや携帯電話も途上国のあちこちで使えるようになっていた時代である。事前のアンケートメント取りでは、これらのツールの最大限の利用がカギとなった。相手の言語や状況に合わせたICTの利用は、障害に関わる領域では大きな武器となる。かつては、途上国でも聴者への依存による一般の電話での連絡以外にろう者たちは遠隔通信の手段を持たなかつた。

しかし、携帯電話の普及が状況を一変させた。ビジネス関係の人達について彼らの間での携帯電話の普及は素早いものであった。一九八〇年代にすでにマレーシアのような地域では日本よりも先に現地のろう者たちは携帯電話を使いこなし始めていた。そしてアジアでも他の途上国にもそうした状況はあつた。この間に拡がり、わずかな生活の余剰金を現地のろう者たちは携帯電話のSMS（文字メッセージ）のためにつぎ込んでいく。それは今、アフリカのろう者たちでも一般的となつている。携帯電話の文字メッセージは、アンケートメント取りの状況を一辺させた。音声通話よりもこちらの方が安いこともあつて、どのような人達も携帯電話のSMSには手慣れており、かつてはPC持ち込みでFAXでやってきたことが今や廉価な最低限の携帯電話一台でできるようになったのである。

ただ依然として残るのは、私たちが外国人であるということである。どれほど、現地で華僑と見まがわれるくらいになつても、どれほど現地の手話に熟達しても、私の立ち位置はフィールドワーカーである。そんなことを、いつも現地のコミュニティの中に埋もれながらも思う。